

「再び自然とともにあるために 日本の庭を読み解く」

名古屋城天守閣を木造復元し、旧町名を復活する会 4月19日 賀城園

岡田憲久

名古屋造形大学名誉教授 景観設計室タブラ・ラサ主催

庭園の様式 整形式と自然風景式

12000 年前 地球の寒冷化 農業革命

生き延びるために人間が環境に大きく手を加えることを始める。

ユーラシア大陸の西 西欧

冬雨が多い。小麦と家畜

稲よりも水が少なくて済む。

森林を切り開き労働力を投下すればするだけ生産性を上げられる。

人間中心主義

・自然観 神 > 人間 > 自然

整形式庭園 (産業革命の少し前 イギリス 自然風景式庭園)

ユーラシア大陸の東 日本・中国・韓国

夏雨が多い。稲と魚

小麦よりより多くの水が必要。水は天から落ちてくる雨。

自然が持つ能力の中での生産性。自然中心主義

・自然観 神 = 自然 > 人間

自然風景式庭園

日本の庭

庭の原初を現す言葉「ニハ」 土の広がる場（何かを迎えるための）

ニハという言葉の語源の中に含まれる 2 面性

山水性

祝祭性

庭の始まり（ニハから庭へ）

山水 （山水性）→「庭」

宇宙システムの表出した場に印だけをつけて直接的に祈る

アニミズム的行為

聖なる行事の場 （祝祭性）→「場」

宇宙システムを司るものはあえて形としては示されず宇宙システムを
司るものを迎えるための何もない場が、自然界と人間界の境、山と里
の境に作られた。



宇宙システムを司るものが

（あえて形を示さない日本独特の表現であったのが）

中国、朝鮮半島より仏教文化とともに

生活空間のすぐそばに、具象として持ち込まれる。

宇宙システムを司るものが言語化された思想として

それを石と、木と、水によって表現。その場が庭。

道教の神仙説 仏教の須弥山説 浄土思想

（楽園の再現 旧約聖書のエデンの園 ）

日本の庭の様式

庭園の様式名称が建築様式・宗教・使われ方等が入り混じる

寝殿造庭園 平安時代

浄土式庭園 平安時代

座観式庭園 鎌倉時代 室町時代

書院式庭園 鎌倉時代 室町時代

池泉回遊式庭園 江戸時代

日本の自然風景式庭園で描かれてきたものは、

自然そのものではなく、

その様式は

池庭 楽園思想や、歌に詠まれた世界と重ねあわせられ、

山と谷と海が

縮景された自然の形 具象表現

枯山水 自然、宇宙が最小限の石と砂で表現 抽象表現

露地 市中の山居 小空間のデザイン

坪庭

農の景

作庭記 日本最古の作庭書

平安時代に関白太政大臣藤原頼通の四男、橘俊綱（たちばなのとしつな
1028～1094）

金沢の谷本家所蔵の鎌倉時代の写本。
文章のみで書かれている。

「石を立てん事、まつ大旨を心得べき也

一、地形により、池の姿に従ひて、よりくる所々に、風情を廻らして、生得の山水をおもはへて、その所々はさこそありしかと、思いよせよせ立べきなり。

一、昔の上手の立置きたる有様を跡として、家主の意趣を心にかけて、我風情を廻らして、立べき也

一、国々の名所を思い廻らして、面白き所々を、わがものになして、大姿をその所々に準えて、和らげ立てべき也」

立石口伝

石を立てんには先主石の角あるを一つ立おおせて、次々の石をば、その石の乞んに従いて立べき也。

露地 市中の山居

市中の山居は山の中で隠棲するよりも価値あると認識されていた。

1580年～1595年 日本に滞在したポルトガル人のイエズス会の通訳カトリック教会の司祭ジョアン・ロドリゲスによる『日本教会史』（1615）の記録。

この都市にあるこれら狭い小家では、たがいに茶に招待し合い、そうすることによって、この都市がその周辺に欠けていた爽やか（さわやか）な隠退の場所の補いをしていた。むしろ、ある点では、彼らはこの様式が純粋な隠退よりもまさると考えていた。というのは、都市そのもののの中に隠退所を見出して、楽しんでいたからであって、そのことを彼らの言葉で、市中の山居といていた。それは街辻の中に見出された隠居の閑居という意味である。